

英語教育と文学的教材 [14] †

コミュニケーション能力の素地を養う効果的な外国語活動の指導法
—その第1歩、学級担任（HRT）の役割—

広瀬 文彦*・幡山 秀明**
鹿沼市立北小学校*
宇都宮大学教育学部**

新たにスタートした外国語活動の指導に不安のある小学校教員は多い。そこで「外国語活動の指導は難しくない」「外国語活動によって学級が変わる」という観点から、①外国語活動において求められているもの、②“コミュニケーション能力の素地を養う”というねらい達成のための学級担任の役割、③教室英語、④活動、以上4点について6か月間の研修で学んだことを、具体例を示しながらできる限りわかりやすい表現でまとめた。

キーワード： 小学校、外国語活動、コミュニケーション能力の素地、学級担任の役割

1. はじめに

現代の日本人は大人も子どもも、人とコミュニケーションをとることがあまり上手ではない人が多い。もちろんコミュニケーション能力が優れている人も存在するが、その割合は年々減ってきているように感じる。人は便利さと引き換えにコミュニケーション能力という大切なものをなくしかけているように思えてならない。コミュニケーション能力は生活して行く上で欠かせないものである。現代社会において、職場や家庭はもちろん学校でもコミュニケーション不足からトラブルに発展することも多い。例えば、「モンスターペアレント」等の問題についても、はじめは小さなボタンの掛け違いからスタートする。早い段階で互いにコミュニケーションが上手に取れれば、その多くは未然に防げるのではないだろうか。

外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」である。「コミュニケーション能力の素地を養う」という外国語活動の目標は現代の子どもたちの直面する課題を解決する手立てとしてまさにピッタリであると思

う。もちろんコミュニケーション能力は、すべての教育活動において培われるものであるが、その一つのきっかけとして外国語活動の授業を展開していけたら素晴らしい。わからない言語を話す相手とのコミュニケーションがうまく取れるようになれば、同一言語を話す周囲の人間とのコミュニケーションを取ることはたやすいこととなる。つまり外国語活動を通して培った「相手の気持ちを考えること」「相手や周囲の雰囲気から自分の言動について考え、行動すること（空気を読む）」などの力は、複雑な現代社会を、周囲の人はもちろん世界中の人々と協力しながら力強く生きていくことに直結する。さらには外国語活動の究極の目標である「世界平和」とつながっていくものであると思う。

2. なぜ「外国語活動」を学ぶのか

「はじめに」にも書かせていただいたが、現代社会は技術の発達により大変便利な世の中になった。しかしその反面、人間関係が年々希薄になってきていると感じているのは私だけではないはずだ。学校においても、児童生徒間もしくは児童生徒と教師間、さらには教師と保護者間のコミュニケーション不足が原因とみられるトラブルは増加傾向にある。

電話の発明で人々は目の前にいない人ともたやすく話せるようになった。その手軽さはインターネットの発達によりさらに加速して行く。直接会うよりも電話の方が気楽であるし、さらには電子メールであれば相手の都合をある程度無視して送信すること

† Fumihiko HIROSE*, Hideaki HATAYAMA**:
English Education & Literature as Teaching
Materials [14]

* Kanuma-Kita Elementary School, Kanuma

** Faculty of Education, Utsunomiya University

も可能である。これはあくまで1つの例にすぎないが、現代社会においてこのような例はほかにもたくさん存在する。人間は便利なことを覚えれば自然と面倒なことはしたがらなくなる。私は便利な世の中が人間のコミュニケーション能力を低下させているように思えてならない。相手のことを理解し、さらに自分のことを理解してもらって初めてコミュニケーションが成立する。初対面の相手とあるいはある程度の顔見知りであっても、これはかなりのエネルギーを必要とするものである。相手の気持ちを考えることは難しいし、時には面倒と感ずることもあるかもしれない。また、個人情報保護が・・・と自己開示をするにも大変生きにくい世の中になってきていることも1つの要因ではないだろうか。

そこで「外国語活動」の出番である。外国語活動は子どもたちのコミュニケーション能力を伸ばすのに最適な学習である。初めは多くの子もたちが、ALTや担任の話す英語を聞くだけではほとんど意味が分からないと思う。しかし、その場の雰囲気や話し手の身振り手振り、表情等から「こんなことを言おうとしているのかな？」と相手の言いたいことやしたいことに思いを巡らしたり、簡単な単語やフレーズ、短い文を用いて、どうしたら自分の気持ちを伝えることができるかと一生懸命になったりすることで、徐々にお互いの気持ちが理解しあえるようになってくる。その時の気持ちはとてもすがすがしいものであると思う。すなわち、外国語活動を通して、子どもたちは「コミュニケーションが成り立つ」ことのすばらしさを数多く体験することになるのである。さらに、その効果が他の教科、領域へと広がっていくことで子どもたちの表現力の向上はもちろん学級経営もうまくいくことは間違いない。

3. 学級担任主導の授業をするために

3.1 学級担任が果たす役割とその重要性

特に重要なのは学級担任の役割。ALTやJTE主導の授業では、他教科との関連性、子どもの実態や日常生活との関わりといった小学校教育で最も大切な要素が欠落しがちである。もちろん豊かな経験と優れた能力を持つALTやJTEもいるが、外国語活動の成功のためには小学校教育というしっかりとした土台が不可欠であり、それを支えるのは学級担任の力である。クラス全体を支える学級担任の活躍なくして外国語活動はあり得ないと言っても良い。

3.2 外国語活動における日本語の役割

「外国語活動の授業は全部英語でやらなくては行けないのか？」という不安を持っている方も少なからずいると思う。だが決してそんなことはない。文科省も言っているように学級担任は子どもたちにとって「進んで外国語を学ぼうとするモデル」である。子どもたちのために授業中の日本語使用は不可欠である。その理由は以下のとおりである。

①子どもとの信頼関係を築くための日本語使用

子どもにとって自分の思いを素直に話し、それを十分に聞いてもらうことで教室が安心できる場所になっていく。

②ユーモアもしくは打ち解けた話をするための日本語使用

日本語でのユーモアが緊張感をほぐし、授業の流れをスムーズにすることも多い。

③子どもに注意する時の日本語使用

騒がしい子を制する程度であれば英語で行うことも可能であるが、それ以上の不都合なことには日本語で行う必要がある。

④理解を確認する時の日本語使用

「先生がいったことを日本語でまとめてください」という指示を出すことで、日本語の表現力も伸ばすことができる。

⑤英語についての説明のための日本語使用

英語と日本語の違いや単語の由来などを話す時に日本語を使うことにより学習がさらに深まる。

⑥学習についての話をするための日本語使用

現在学習していることが中学以降の英語学習とどのように関連しているのかを意識的に伝えることで学習動機を高めることができる。

※英語の授業での言語選択は非常に大切で、その都度教師はどちらの言語を使用するのか十分に意識して使用しなければならない。

3.3 T1としてすべきこととしてはいけないこと

何よりも大切なことは、子どもたちに「英語が好き」「英語は楽しい」と感じさせるような授業を展開することである。好きになればその後はいくらでも自分で学ぶことができる。私は学生時代、英語が1番嫌い(苦手)な教科であった。だが、今は英語を勉強することがとても楽しい。ここでは研修を通して学んだことに加え、英語に対する私自身の心境の変化を分析することから、私たち教師がT1としてすべきこととしてはいけないことを考えてみたい。

①コミュニケーションの楽しさに気付かせる

10月の最初の授業では英語で自己紹介することを求められた。外国語活動の授業を除けば英語から遠ざかって20年以上であったので、名前と職業、趣味程度しか英語で話すことができなかつた。研修の目的に至っては誤解されることを恐れるあまり、ほとんど日本語で話してしまった。このときの恥ずかしさと悔しさは今でも強く心に残っている。しかし、授業にも慣れてきたころ、自分の考えをただどしくではあったが英語で話せるようになってきた。それに対して相手から返答があり、また自分からも返す、というようにコミュニケーションがとれた時の喜びは「英語をもっと学びたい」というモチベーションにつながっている。些細なことかもしれないが、大人の私でもこれほどの喜びを感じることができるのであるから、純粹な心を持った子どもたちならなおさらであると思う。私たち教師は外国語活動の授業を通して、子どもたちにコミュニケーションの楽しさを数多く体験させることが大切である。さらにこの経験は外国語活動のみならずすべての学習や生活においてとても役に立つものとなるであろう。

②進んで英語を使おうとするモデルになる

私自身「自分の正しくない発音や、文法的に間違った表現のある英語で子供たちに話しかけていいものだろうか？」と悩んでいた時期もあった。しかし研修を進めていくうちにそれは杞憂であったことがわかってきた。まず文法についてであるが、外国語活動において使用する教室英語には複雑な文法は必要ない。次に発音であるが、高等学校の英語科の目標が「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」であることから考えても、子どもたちにネイティブのような発音を身につけさせるのではなく、「通じる発音」を身につけさせることが大切であると思う。特に小学校においては技能の習得を第1の目標としていないので、まずは積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が重要となる。「正しい発音についてはALTやCD等に任せてしまおう」と割り切って、授業を進めることで外国語活動への抵抗感も軽減される。また、そうすることで本来の目標である「コミュニケーション能力の素地を養う」ための授業の展開に集中することができる。

英語が専門ではない教師にとって、子どもたちの

前で英語を話すことには少なからず抵抗がある。しかし専門ではない英語を使って、一生懸命にそして楽しそうにALTと会話する教師の姿を見て、子どもたちは「英語って楽しいそう。僕も話してみよう。」という気持ちを持つのではないだろうか。そういった意味から考えると外国語活動においては英語が専門ではない教師のほうがむしろ向いているといえるのかもしれない。大切なのはスキルではなく“進んで英語を使おうとするモデルになる”ことである。

(ただし、日々自分自身の教室英語のブラッシュアップにも努めたい。)

③子どもたちの心に訴える評価をする

ALTやJTEからの評価は“Good”, “Great”などの限られた英語表現によるものだけの表面的なものになってしまうことも多い。そこで学級担任が日本語を使い「今日のAさんの〇〇〇はとても良かったね!」というような他の授業でも行われている当たり前のフィードバックをすることで、子どもたちの心に訴える評価をする。

④通訳にならない

ALTが英語で話をしたり指示を出したりした時、英語に慣れていない子どもたちは何をしていたかわからず戸惑うことが多いと思う。そのとき良かれと思いつぐに日本語で訳してしまうことはいけない。なぜならALTの英語の後に担任が日本語で説明してくれることがわかってしまうと、子どもたちは英語を聞かなくなってしまうからである。

ではどうしたらよいのだろうか。私はALTの英語を繰り返すだけでいいと思う。もちろんただ繰り返すのではなく、動作や声の強弱、表情を使って子ども心に語りかけながら。例えば“Make a circle.”という指示がALTから出されたとき、担任は“Make a circle.”と英語を繰り返しながら大きな円を作る動作をする。これを数回繰り返せば、子どもたちは丸くなるように移動を始めるだろう。また、教室が騒がしいとき“Be quiet!”と言いながら厳しい表情で人差し指を口に当てれば、子どもたちには教師が言わんとしていることが通じると思う。

⑤子どもの英語の間違いを直接指摘しない

外国語活動では定着を第1の狙いとしていない。評価に関しても「〇〇ができる」とはせず「〇〇しようとする」「〇〇している」という表現が適切であるとされている。つまり正しい英語を話すことが大切なのではなく、外国語を用いて進んでコミュニ

ケーションを取ろうとする態度が大切なのである。正しくない英語を使ったことよりも、積極的にコミュニケーションを取ろうとした態度のほうを評価すべきである。したがって子どもが間違っただけの英語を使っても直接指摘することはしないほうがよい。流してもよいところは流し、そうでないときはやんわりと正しい表現で修正したものを子どもの発言の後に言ってみる等の配慮が必要である。「○か×か？」という評価は外国語活動には当てはまらない。

⑥スピーキングを急がない

言語習得がいかに難しいかということは誰もわかっていない。わずか週に1時間の活動だけで英語が話せるようになることは不可能である。外国語活動の目標は「外国語を通じて、コミュニケーション能力の素地を養う」ことである。アウトプットを求めるのではなく、ALTやJTEと連携して、まずは十分なインプットを与え、英語を耳に慣れさせることを先に考えるべきである。

3.4 ALT (JTE)との連携

毎時間ごとに授業中の細かい役割分担や活動、ねらいなどを共通理解していくことができるのが理想であるが、ALTは週に1日か2日しか学校に来ない。さらに、高学年担任が6時間目の授業を終えて児童を帰宅させ、職員室に戻れる時刻にはALTの勤務時間が終わっていることがほとんどであると思う。つまり、実際問題として十分な打ち合わせの時間を確保することはかなり難しい。では、どのようにして連携を図るべきか。私なりの考えを以下に述べてみたい。

①ALTとのコミュニケーション

4月(前後期交代制の場合は10月)にALTが初めて学校にやってきた日から、とにかくALTとなんでもいいから会話(日本語でも英語でも)をして、コミュニケーションを図るように心掛けたい。授業の話題もいいが、世間話や自己紹介をしたり、出身国やALT自身のことについて聞いてみたり(もちろんプライベートに踏み込み過ぎない配慮を持って)してお互いをよく知ることが、T. T. 指導についての効果的な支援に直結するはずである。

②授業の打ち合わせ

簡単でいいのでALTに本時の流れを示し、具体的にどうしてほしいのかを指示する。その際に実際にゲームをやってみるとわかりやすいと思う。授業開始までに十分な打ち合わせの時間が取れないときは、

授業前の休み時間に簡単に打ち合わせをする。それも難しければ職員室から教室まで歩きながらの数分でもいい。授業中の簡単な役割分担等の確認を必ずすることが不可欠であると思う。文部科学省の新教材を中心に進める際には、指導案が公開されているのでそれをもとに話をしてもよい。日々の積み重ねにより、ALTとのコミュニケーションが十分に取れている関係であれば、授業中の目配せやわずかな声掛けでもお互い効果的な支援ができるようになるであろう。

③授業中

学級担任が中心になって授業を進めるのはもちろんであるが、ALT(JTE)をCDのように英語のモデルのみの役割につかうのはNG! できるだけALT(JTE)と児童がコミュニケーションを図る場面をもたせたい。(ただし授業の展開の主導権は担任が握ることが大切) また、「活動と活動のつなぎ」(内容の変わり目)の際に子どもが出すサイン(発話の姿、表情、活動の様子など)を的確に解釈し、それをALT(JTE)に伝えることも重要である。

④授業の反省

“反省会”として時間の確保ができない場合(これがほとんどであると思うが)、休み時間や職員室までの帰り道等の短い時間でもよいので、本時の良かった点、改善すべき点の話をしたい。そうすることでALTも「この先生はやる気がある」と感じると思うし、何よりも担任自身のスキルアップにもつながると思う。

3.5 評価について

外国語活動の目標に照らし合わせて考えたとき、評価は数値化できる性質のものではないことはわかると思う。つまり総合的な学習同様、文章によるものとなる。そこで気をつけなくてはならないのが文末表現である。たとえば新教材「Hi, friends! 2 Lesson8 職業・将来の夢」において“将来の夢を英語で答えることができる。”と評価するのは誤りである。正しくは“将来の夢を英語で答えようとしている。”となる。なぜなら小学校外国語活動の目標及び趣旨にも「できる」「理解する」という文言はなく、「しようとする」「している」という表現になっているからである。研修会で評価についての質問を聞く機会が何度かあった。そこでもやはりすべてにおいて専門家の回答は、「目標にないことは評価しない」であった。このように、「できる」では

なく「しようとしている」と評価することは、授業において「慣れ・親しみ」が目標になり、「英語が話せるようにさせたい」「単語が言えるようにさせたい」という誤った指導観を打ち消すものとなる。評価についてきちんと理解することができれば、「正しい発音で…」や「文法を間違えないように」等の、外国語活動に対してのコンプレックスを抱く必要がないことに気付くであろう。

4. 教室英語 (Classroom English) について

4.1 なぜ教室英語が必要なのか？

文部科学省も研修ガイドブックの中で「クラスルームイングリッシュは、児童のリスニング能力を飛躍的に向上させるというのではなく、外国語活動の雰囲気作りとしての意味合いが強い。また多用することにより、児童が一生懸命教師の英語を聞こうとする態度を引き出すことになる。指導者(HRT)も英語を使う良いモデルとして児童の前でできるだけ英語を使うように努力したいものである。」と語っている。授業で教師がたくさんの英語を使うことで、子どもたちの意識も高まり“英語を話す雰囲気”が作られ、さらに、子どもたちは「先生は何を言おうとしているのだろう」と教師の言うことに注意深く耳を傾けてくれるようになる。このことは他の学習にも当然好影響を与え、ひいては学力の向上にもつながっていくと思う。また、専門家によれば、英語を上手に使うことができるようになるには、日本語に訳して考えるのではなく、英語を使って考える癖をつけることが大切で、教師が教室英語を使うことは、子どもたちが英語を英語のまま理解する力を養うことにつながるという。

また、英語の指示や質問に対し正しい行動ができたときの子どもたちの達成感や素晴らしいと思う。この積み重ねが自信となり「英語をもっと勉強したい」というモチベーションを高めることにもつながっていくはずである。さらにそのような子どもの姿を見た私たち教師も外国語活動の指導に自信を持つようになるのではないだろうか。

①教室英語の使用頻度は？

授業は“オールイングリッシュ”で行う必要はないと私は考える。もちろん子どもたちが外国語活動に十分に慣れた習熟された集団であるなら話は別であるが、英語に慣れていない子どもたちに“オールイングリッシュ”で授業を行うと、子どもたちは教師の言っていることが理解できず何をしたらよいの

かわからなくなり、やがて「外国語活動は面白くない」と感じてしまう。したがって、子どもの実態と習熟度を見極めながら、常に英語と日本語のどちらかで話したらよいかを考える必要があると思う。具体的には簡単な指示や質問、コメントは英語で行うことが望ましいのではないだろうか。

②教室英語の教え方

ここでは研修を通して学んだことから、教室英語をどのように子どもたちに教えたらいいかということについて私なりの考えを述べたい。まず、英語を言った後、すぐに日本語訳をいうのはよくない。そうしてしまうと子どもが英語を聞くことをせず、日本語訳を待つようになってしまうからである。では、具体的にはどのようなことから始めたらよいのだろうか。外国語活動の目標は「(外国語を通じて)コミュニケーション能力の素地を養う」ことである。すなわち、子どもたちに常にコミュニケーションを意識させながら授業を展開していく必要がある。子どもたちにはこれまでの生活経験があり、場面や雰囲気から相手の気持ちを想像する力が育ってきている。たとえば“Stand up, please.”という指示を聞いた時、他教科におけるこれまでの経験を通して「この場面では先生は『立ってください。』と言うことが多い。だから起立しよう。」と想像することができる。その際、ジェスチャーも加えながら“Stand up, please.”といえ、ほとんどの子どもは起立してくれると思う。コミュニケーションという言葉や辞書で調べると「人間が互いに意思・感情・思考を伝達しあうこと。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える身振り・表情・声などの手段によって行う。」とある。このことを常に意識しながら、子どもたちにまずは身振りや手振り、声の強弱を意識しながら、簡単な単語やフレーズで語りかけるようにしていけばよいのではないだろうか。そのうち何度も繰り返される単語・フレーズについては慣れるにしたがって言葉だけでも理解できるようになっていくだろう。

4.2 児童の使用する教室英語

児童が使う英語については、授業を進めていくうえで自然と身についていくものが増えていく(覚えこませることは外国語活動の本質と異なる)と思われるが、たとえば、児童が自分の言いたいことが英語で何というのかかわからないときに「〇〇は英語で何と言うのか教えてください。」と聞いたり、逆に“May I speak Japanese?”と言ったりすることが抵

抗なくできるとよい。学級担任はそのように自由で寛容な雰囲気づくりに努める必要があると思う。

5. 活動について

楽しいだけでなく、自然とまたやりたくなる活動を考えたい。それをやり遂げたという達成感、成就感を体得できるような活動は前向きな児童を育てると思う。また、指導者が楽しい授業は児童も楽しい。ALT と協力して私たちも前向きに活動している姿を見せたい。そのためには指導者が授業の流れをしっかりつかんでおくことが大切である。

5.1 子どもにとって必然性はあるか？

大きな声でやたらとテンションが高い、一見活気のあるように見える活動が良い活動であると誤解してはいないだろうか。私はどんな活動も子どもにとっての必然性がなければ、それはその場限りのものとなってしまおうと思う。私にも経験があるが、よくある失敗例として“Repeat after me.”の繰り返し。これは子どもにとってあまり意味のないことになってしまうことが多い。(技能の習得を目標とする英語においては重要であると思うが)

では、子どもにとっての必然性とは何であろうか。活動において使われる(言う)英語が、子ども自身「言いたい」「聞きたい」と感じているものであるかどうかだと思う。「言いたい」「聞きたい」ことであれば、それはまさしく主体的な発言である。

5.2 インタラクション

インタラクションとは和訳すると「相互作用」「交流」というような意味である。一方通行ではコミュニケーションは成り立たない。双方向に意味のあるやり取りがなされて初めてコミュニケーションが成り立つのである。そのためには、子どもたちの反応に対し、担任から返す一言がカギとなる。一問一答のようなやり取りで終わるのではなく、意味のあるやり取りが繰り返される、インタラクションが十分に図られている授業を展開しなければならない。このことはとても難しく感じるかもしれないが、よく考えてみると他教科の授業で行っている授業はまさにインタラクションを意識したものになっている。

“はじめに”にも書いたが、「外国語活動は特別なものではない」のである。

外国語活動においてはできる限り(易しい)英語で子どもとインタラクションを図りたい。言葉だけでは何を言っているかわからないことも多いと思うが、表情やしぐさ、雰囲気や子ども自身の人生経験

から、「おそらく先生はこんなことを言っているのだろう」と想像することはできると思うし、私はそのように思いを巡らすことがコミュニケーション能力を高めることにつながると思う。ただし、このとき子どもにまですべて英語でのインタラクションを求めてはいけない。記述のとおり、アウトプットを急ぐよりもまず十分なインプットを与え、耳を慣れさせることが先決である。また、担任とALTとのインタラクションも重要である。たとえば、

担任(以下H) : How are you, ○○sensei?

ALT(以下A) : I' m cold.

H(心配そうな顔でコートを差し出しながら)

: Here you are. Take care.

A : Thank you.

などという場面を示すことで相手を思いやること、関わりあうことの大切さに気付かせることもできるのではないだろうか。

5.3 コミュニケーションのためのインプット

外国語を通じて「コミュニケーションの素地を養う」目標の達成のために、子ども同士もしくは子どもと教師やALTとのコミュニケーションを図ることのできる活動が求められる。ではそのためには具体的にどんなことをすればよいのだろうか。たとえばテキストに従って、会話のやり取りの練習をする。そうすればパターン化されたやりとりを覚えることはできるだろう。しかしそれは、私が中学生時代、英語の授業の初めに毎回交わした挨拶、“How are you? (これはよいと思う。) How is the weather today? (天気? 見ればわかる。それに「今の天気はどう?」などと日常聞くことはまずない。) What day is it today? (「今日は何曜日ですか?」という質問は幼稚園の朝の会のよう)等のように、あまりコミュニケーションが図れているとは思えないものになってしまう恐れがある。(繰り返しになるが技能の習得を目標とする中学校英語の場合は、上記のようなものも文の構造や文法事項等を知るうえで有効であると思う。私が経験した英語の授業を否定しているわけでは決してない。あくまで、「外国語活動において」どうすべきかという考えに基づいて述べたものである。)

そこで大切なのが、日常のインプットであると思う。そのためにはALTと担任のやりとりをたくさん子どもに聞かせることが大切である。そこには必ずコミュニケーションが存在する。特に活動の方法を

説明した後、担任とALTでデモンストレーションをすることは重要である。また、視聴覚教材（特にALT不在の、担任単独での授業ではかなり有効である）も積極的に活用し、より多くのインプットを子どもたちに提供していきたいものである。

5.4 活動の流れ

①あいさつ(ウォームアップ)

授業の雰囲気作りや動機付けの役割を果たす。クラスルームイングリッシュの一環として、なるべく英語で行うようにする。

②復習 (Review)

週に1時間の授業では前回学習したことの多くを忘れてしまっていることが多いはず。1回で定着させようと考えず、時間をかけて何度も同じ表現に触れさせながら少しずつ身につけさせて行くことを考える。「英語がわかった」と感じるのが児童にとって大きな自信につながる。

③新しい活動や言語材料の導入

新しい語彙やフレーズ、構文(ターゲット・センテンス)とその機能(役割)を児童に提示する活動を行う時は、絵や写真、実物、動画、ジェスチャーなどを用いたり、担任とALTによるデモンストレーションを行ったりなどして児童が理解できるような多くのインプットを与えるようにする。(英語だけでは伝えられないような複雑で抽象的な内容ならば、日本語を上手に使った方が良い。) また、同じフレーズや語彙が繰り返し出てくるチャンツも有効。(その際にはピクチャーカードやワークシート、板書等を一緒に利用するとさらに効果的)その後、新しい語彙やフレーズについて音声による十分なインプットをたっぷり行ってから発話へと進む。十分なインプットがなされていれば児童は自然に発話するようになる。(ただし、発話を急ぐことは厳禁)

④展開活動(例)

・ドリル活動ー「聞くドリル」「発話のドリル」

「必要な情報を得るために英語表現を使用する」という本来のコミュニケーションに近い活動を授業で行うことはとても大切。ただしその前提として、必要な英語表現を聞き取れること、発話できるようにすることが必要となる。何度も聞いて繰り返し練習し言える自信がついてこそ、コミュニケーション活動を行うことができる。そのためのドリルとして「ただだまって聞く」「先生のあとについて繰り返す」だけではすぐに飽きてしまうので、歌やチャン

ツ、ゲームなど多様な方法を用いて無意識にたくさん聞き(聞くドリル)、たくさん言う(発話ドリル)ことができる方法を工夫する。

・情報を伝え合うコミュニケーション活動、自己表現活動

語彙やフレーズに慣れてきたら、その英語表現を使用したコミュニケーション活動、ショー・アンド・テルを含む自己表現活動へと広げる。また、本当のコミュニケーションに近づけるために、児童間のインフォメーションギャップを作り、相手だけが知っている情報を得るために会話をするような活動を設定する。簡単な表現でも「言いたいことを英語で伝えられた」という体験は次の活動への大きな動機付けとなる。そのために、英語を使う活動を通して子どもたちが新しい発見をしたり、知りたいことがわかったりするような活動内容を考えることが大切。

・達成感を得られるタスクを行う活動

実生活に即した場面設定において、英語を使って課題を解決するようなタスクを行う活動は、仲間と共に活動をすることで、友だちと一緒に何かを成し遂げる経験や友達と心が触れ合う喜びを体験させることができるので、知的好奇心が高まる高学年の児童にたいへん有効である。

⑤まとめ・評価・振り返り

担任やALTがコメントするだけでなく、子どもたちが自ら活動を振り返って意見を言う形(相互評価や自己評価)もよい。

⑥終わりのあいさつ

授業が進むにつれて用いる英語表現のバリエーションも増やしていく。ALTやJTEへの感謝の言葉も忘れないこと。

5.5 活動をする際の注意点

①「できた」「わかった」をたくさん経験させる

本当のコミュニケーションに近い場面を設定するのは、やはり英語表現を練習し、発話できるようにするためのドリルが必要。多様な教材・手法を用いて「飽きないドリル」を工夫する。

②全員が参加できる活動を

「何もすることがなく、ただ座っているだけ」という状況が何分間も続かないように工夫する。

③発達段階にあった活動を

子どもたちが乗ってこない時、その活動は子ども発達段階にあっていない。高学年であれば知的好奇心をくすぐるような内容が良いが難しくなりすぎな

いように。

④聞きたくなる、話したくなる活動を

「しっかり聞き、しっかり伝える」指導をしたい。時間内に何人にインタビューできたか競わせるようなものは避ける。大切なのは数やゲームの勝ち負けではなくコミュニケーションの質である。特に双方向の意味のやりとりが行われているかが重要である。また気持ちを込めて言葉を伝える体験もさせたい。そのためには状況に応じて声の大きさや言い方をコントロールできるように注意しながら指導する。さらに「必要があるから聞く」という状況を意図的に作ることも重要である。

6. おわりに

毎朝登校（出勤）してから夕方までは大学で、帰宅後もオンラインの英会話スクール等、まさに“英語漬け”の毎日を送っていたある日、ふと気づいたことがある。それは「英語の勉強って楽しい」と感じている自分がいるということだ。おもしろいことに学生時代、私が一番嫌いな教科は英語であった。それが180度変わってしまったのはなぜか。それは研修を通して“コミュニケーションのすばらしさ”を感じる場面を数多く経験させてもらったからだと思う。その中で一例としてこんなことがあった。基本オールイングリッシュの講義においてのことである。そこではリスニングはもちろん自分の質問や回答も英語で言わなくてはならない。英語が苦手な私は毎回とても苦労したが、必死になって辞書を引き、文法上の多少の誤りは気にせず聞き直して話すことを心掛けた。先生や学生の話している英語にはわからない単語も多く、辞書を引いても追いつかない。しかし、表情やその場の雰囲気、今までの経験などから「こんなことを言っているのかな。」と思えることが日に日に増えていった。私のスピーキングもはじめは文が1つ2つの短いものであったが、意識して長い文章を話すようにした。おそらく誤りも多かったと思うが、先生や学生たちは温かく受け入れてくれた。「ずいぶん長く英語で話せるようになりましたね。」とある学生から言われた時はとてもうれしかった。この喜びはもちろん英語で話すことができたこともあるが、1番は何と言っても心と心が通いあう“コミュニケーションのすばらしさ”を感じることができたからだと思う。

私は外国語活動を通してこういった経験を数多く子どもたちにさせたいと強く思った。「外国語活動

を通して、コミュニケーションを図ることが苦手な現代の子どもたちを変えていく1つのきっかけをつくりたい」という内地留学の志望動機が正しかったと確信した瞬間でもあった。“コミュニケーションの素地を養う”ことがなぜ大切か自らの経験を通して気づき、そのためにどうしたらよいかという自分なりの具体的な方法を考えることができた。これが今研修の成果である。

最後に今後の課題であるが、私が半年間の研修で学んだこと、感じたことをいかにして1人でも多くの先生方に伝えていくかという点に尽きると思う。私は志望動機の1つに“現場の外国語活動への苦手意識”を挙げた。このことについては少しずつ改善されてきているようには感じるが、まだ完全に払しょくされているとは言い難い。週にわずか1時間、しかも高学年のみに設定されている外国語活動のために使える時間は現場の教師にとってわずかでしかない。私は外国語活動のために多くの時間を割いてほしいとはいわない。「自分にもできる」という意識をすべての先生にもってもらいたいと思う。そのための具体的な行動を起こすことが私の今後の課題であり、使命であると考えている。まずは現任校から、校内研修はもちろん、日々の授業や先生方との会話の中で少しずつ自然に伝えていきたいと思う。

参考文献

- 岡秀夫・金森強「小学校英語教育の進め方『ことばの教育として』」（改訂版） 成美堂
アレン玉井光江「小学校英語の教育法—理論と実践」 大修館書店
太田美智彦「どうする？小学校英語必修化」日本標準
山田雄一郎・大津由紀雄・斉藤兆史「『英語が使える日本人』は育つのか？小学校英語から大学英語までを検証する」 岩波書店
茂木弘道「小学校に英語は必要ない。」 講談社
直山木綿子「英語ノート1を活用した英語活動の授業」「英語ノート2を活用した英語活動の授業」「外国語活動実践事例集1」「外国語活動実践事例集2」小学館
高橋美由紀（編・著）「これからの小学校英語教育の発展」 アブリコット出版
Bryan Gardner・Felicity Gardner
「教室英語ガイド」オックスフォード大学出版局

（本稿の実質的著者は広瀬文彦教諭です）